

同居家庭（祖父母）児の保育に於ける 弊害の有無について

秋田県衛生科学研究所

母子衛生科

田 沼 慶

1 調査目的

本調査は、一般に「祖母子^{おばあさん}」と言われている子供についてとりあげてみる。即ち、祖父母、又は祖父、祖母のいずれかとの同居から生ずる過保護や、溺愛など（特に過度の接触や、赤坊扱い等）保育上悪弊になっていると言われている一般説の真否性について、核家族の中で育つ子供との対比に於いて検討を試みることにした。

2 調査対象

全県的な視野で考察をすすめる関係上、県内、全保健所管内10カ所で行った「3才児健診」の受診児、2,378名を本調査の対象とした関係上、年令的には3才を中心とした幼児になる。

3 調査方法

「3才児健診」の際、そのスクリーニングファイルとして併用している健康診査アンケート（別紙）を素材として、とりあげてみた。その内容については、17項目の設問からなり、それぞれ三通りの「ない」「ある」「わからない」の返答が用意されている。これに対して保護者は、子供の常態像からその何れかの答えを選ぶ、という質問紙法になっている。なお17項目の内容については、「言語」「運動機能」「視聴覚機能」「生活習慣」「性格行動上の問題」「習癖」「社会性」「異常疾患の有無」等について、3才時期の発達を特徴づけた設問がなされている。以上のようなアンケートの内容に対して、祖父母と同居の子供（以下、

A群と記す）と、核家族で育つ子供（以下、B群と記す）の保護者が示した反応結果をとりあげ、両群比較の素材とした。即ち、17項目については、前述のように、3才時期の特徴を衝いた設問であるだけに、全項目にわたって問題点を持たない子供は、「問題なし」として、一応、3才時期の子供としての健康像とみなし、このような健康児が、A、B両群のいずれのグループにより多く属するか、それについて検討を加えてみた。

作業順序としては、まず、総数 2,378名を1集団とし、A、B両群に分け、その中から「問題なし」を両群毎に分類した。はじめに、全体像として検討を行ない、次に各保健所毎に検討を加えた。表1は各保健所毎に、A、B両群を比較したものである。

4 考 察

1) 全 体 像

有効総数 2,378名中、A群は 1,239名で、52.1%、これに対してB群は 1,139名で、47.9%、又総数 2,378名中の「問題なし」は 635名、この中A群は 280名で44.1%、B群は 355名で55.9%になる。参考迄にA群の内容を示すと、次の通りである。

- a 祖父母両人と同居で「問題なし」が 169名。
- b 祖父と同居で「問題なし」が14名。
- c 祖母と同居で「問題なし」が97名で、したがってA群中「問題なし」が 280名になる。この結果は、前述のように、全体の「問題なし」

635名中、44.1%ということになる。又、これをA群の中で位置づけてみると、23.4%に当る。同時にB群 1,139名中の「問題なし」355名は、31.2%に当ることになる。

このようなA、B両群の「問題なし」の割合に

対して統計学的検討を加えた。その結果、1%の危険率で仮説は棄却される結果になり有意差がみられることになる。即ち、B群により健康児が多いといったことになる。

2) 地区別(保健所)単位の考察

表 1 各保健所毎A B両群に於ける「問題ナシ」

保健所名	総 数	同居(祖父母)家族群			核 家 族 群		
		同居家庭児数	問題ナシ	%	核家庭児数	%	
花 輪	513	224	47	21.0	289	95	32.9
鷹 巢	155	91	14	15.4	64	21	32.8
五 城 目	268	169	29	17.2	99	45	45.5
男 鹿	285	71	21	29.6	214	52	24.3
秋 田	178	156	30	19.2	22	16	72.7
本 荘	106	25	7	28.0	81	25	30.9
矢 島	315	186	52	28.0	129	18	14.0
角 館	234	105	19	18.1	129	34	26.4
横 手	241	162	44	27.2	79	36	45.6
湯 沢	83	50	17	34.0	33	13	39.4
T	2,378	1,239	280	23.4	1,139	355	31.2

注 A——同居家庭児

B——核家庭児

表1を左上から順序に考察をすすめていく。

○花輪保健所、総数 513名

A群 224名中、「問題なし」47名で21.0%

B群 289名中、「問題なし」95名で32.9%

以上についての検討結果、危険率1%で、仮説棄却が成り、両群に差がみられることになる。即ち、B群が優位で、核家族で育つ子供に健康児が多いという結果が得られた。

○鷹巢保健所、総数 155名

A群91名中「問題なし」14名で15.4%

B群61名中「問題なし」21名で32.8%

この結果、危険率1%では統計学的な差はない。但し、危険率5%をとると、仮説の棄却が成立し、有意差がみられることになる。即ち、B群の優位性が出てくることになるが、この場合は、例数を

増すか、或いは検討方法に尚工夫の余地あるものとして、結論は保留としたい。

○五城目保健所、総数 268名

A群 169名中、「問題なし」29名で17.2%

B群99名中「問題なし」45名で45.5%

この結果は危険率1%で有意差がみられる。この場合も核家族で育つ子供の方に優位性がみられる結果になっている。

○男鹿保健所、総数 285名

A群71名中「問題なし」21名で29.6%

B群 214名中「問題なし」52名で24.3%

この両群、統計学上の差はみられない。即ち、特に同居家族で育つ子供に問題があるというわけでもなく、又核家族で育つ子供が特に優っているという結果にもならない。

○秋田保健所、総数 178名

A群 156名中「問題なし」30名で19.2%

B群22名中「問題なし」16名で72.7%

この結果については、統計学的に有意差がみられる（危険率1%）、A群が83.0%も占めている中で、小数のB群に「問題なし」が集中している（約73%）ということは、尚例数を増して検討の余地がある。

○本荘保健所、総数 106名

A群25名中「問題なし」7名で28.0%

B群81名中「問題なし」25名で30.9%

この結果については統計学上の差はなく、いずれのグループの環境についても、優劣をつけることは出来ない（危険率1%）

○矢島保健所、総数 315名

A群 186名中「問題なし」52名で28.0%

B群 129名中「問題なし」18名で14.0%

この結果については、危険率1%で有意の差がみられ、仮説棄却が成立することになる。但し、核家族の保育環境が祖父母との同居環境よりこの場合は望ましくないという結果になる。

○角館保健所、総数 234名

A群 105名中「問題なし」19名で18.1%

B群 129名中「問題なし」34名で26.4%

この場合危険率1%では有意差がみられるが、5%では仮説棄却は成立しない。依って、今後、例数を増して再検討の要がある。

○横手保健所、総数 241名

A群 162名中「問題なし」44名で27.2%

B群79名中「問題なし」36名で45.6%

この結果については、危険率1%で、仮説の棄却が成立し、有意差がみられる。即ち、核家族群に健康児が多いという結果になる。

○湯沢保健所、総数 83名

A群50名中、「問題なし」17名で34.0%

B群33名中「問題なし」13名で39.4%

この結果については統計学上の差はみられない。両群の保育環境に積極的な差異はない。

以上のように、県全体としてのまとめ（全体像）と、各保健所毎に、A・B両群の比較を行って見た。その結果、全体像の場合は、危険率1%で仮説の棄却が成立し有意差がみられることになる。この限りではB群、即ち核家族で育つ子供の方に健康児が多いということになる。

次に、各保健所毎に、A、B両群比較の結果については、10保健所中「有意差あり」が5保健所、又、1%では仮説が採られても、5%の危険率では棄却される。このような2保健所については、結論留保とした。他の3保健所については、「有意差なし」ということになる。「差あり」が5カ所「差なし」が3カ所で「差あり」の場合、矢島を除いてはいずれもB群が勝っている。又、全県的な視野でとらえた全体像の場合も「有意差あり」でB群が勝っている。このように、相対的にはB群の優位性が考えられるが、結論を引き出すには、尚、方法上の検討が必要なように考えられる。又、このような結果から、はじめの調査目的に、かかげた、俗に言われる「祖母子」の内容を、積極的に否定出来るまでには至らなかった。

保育上の子供への影響として、今日の問題の中から、同居家族と核家族の保育環境に検討を加えたわけであるが、保育上の子供への影響は、決して単一なファクターによるものでないことは勿論で、そのことから、統計結果を直ちに現実の環境にはめこんで割切るとは、甚だ早計で、例えば、統計結果から直ちに祖父母との同居が不適で、核家族が100%望ましいと言ったような結論への導き方は好ましくないと考えられる。何れかを優位と決めつけてしまうには尚まだ問題点が多く残されている。

核家族が家族構成として望ましいユニットであるとして、その方向に世の中が、移行しつつあるとしても、地域によっては長い移行過程が続くはずである。そのような過程の問題を含めて、同居家族への適切な指導により、両群の保育環境に出来るだけ差異のない、或いは差異の解消策へと、そのことを含めて今後の課題としたい。

5 総 括

参 考 文 献

- 1) 松田道雄
「日本の幼児教育とルソー」 (岩波)
- 2) 牛島義友
「家族心理」 (金子書房)
- 3) A・ポルトマン
「人間論の生物学的断章 (人間はどこまで
動物か)」 (岩波)
- 4) T. パーソンス「核家族と社会化」